

曾和田遺跡

ジェイフォン株式会社携帯電話無線基地局建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2003.3

宮崎県北郷町教育委員会

曾和田遺跡

ジェイフォン株式会社携帯電話無線基地局建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



2003.3

宮崎県北郷町教育委員会

序

北郷町は宮崎県南部の山間部にあり、県南圏域の北端に位置しています。藩政時代には飫肥藩に属し、江戸時代に参勤交代路として利用された旧飫肥街道が町内を南北に縦断しています。現在では交通事情も変わり、かつての街道に代わって県道日南高岡線が県南地域と県央地域を結ぶ主要道路としての役割を果たしています。

本町は隣接する日南市と古くから歴史的に一体的な生活文化圏を形成してきました。そして、その基軸をなしたのが人と物と情報が行き交う道でありました。かつて、情報は人や物の移動によってもたらされるものでしたが、現在では人や物の移動を伴わずに瞬時に世界的規模で最新の情報を得ることができるようになりました。今や時代は、情報が人や物の移動と同列に扱われた時代から、情報のみを扱う独自のネットワークを構築する時代へと変化しています。

今回報告する曾和田遺跡の発掘調査は、ジェイフォン株式会社の携帯電話無線基地局建設に伴い行われたものです。私たちはこれから時代を切り開く新しい情報網の整備を望みながらも、過去の情報から今を生きる知恵を読み解く努力を怠ってはならないと思います。本書がその一助となり、今後の文化財保護への理解に役立つと共に、いろいろな場で広く活用されれば幸いに存じます。

最後になりましたが、調査を実施するにあたり御協力いただきました関係者の皆様に対しまして、心よりお礼申し上げます。

2003年3月

北郷町教育委員会

教育長 川崎満也

例　　言

1. この報告書は、ジェイフォン株式会社の携帯電話無線基地局建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2. 発掘調査はジェイフォン株式会社より委託され、北郷町教育委員会が実施した。

3. 調査組織は下記のとおりである。

調査主体 北郷町教育委員会

教育長	川崎満也
生涯学習課長	鈴木敦子
生涯学習課長補佐兼係長	橋本寛敏
主事	谷元真理(庶務担当)
主事	平原英樹(調査担当)
発掘作業員	稲田昌子　梶谷京子　加藤由紀枝 川越タケノ　鳩原武男　外山明子
	中竹スミ子　原井征夫　日高和子
整理作業員	加藤由紀枝　谷元正子

4. 現地での実測・写真撮影等の記録は平原英樹が行い、地形測量及び遺構実測の一部を有限会社ジバング・サーベイに委託した。

5. 空中写真撮影は九州航空株式会社に委託した。

6. 方位は磁北、レベルは海拔高である。

7. 本書の執筆・編集は平原が行った。

8. 本書中の記号は、S Bが掘建柱建物、S Cは土抗、S Eが溝状遺構、S Nが粘土状遺構、S Rが炉跡、S Zが竪穴状遺構を表している。

9. 出土遺物は北郷町教育委員会で保管している。

本文目次

I 序 説	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 遺跡の位置と歴史的環境	2
II 調査の記録	3
1. 調査の概要	3
2. 基本層序	3
3. 縄文時代の遺構と遺物	10
(1) 遺 構	10
1) 土 坑	10
2) 溝状遺構	10
3) 壓穴状遺構	10
(2) 遺 物	12
1) 土 器	12
2) 石 器	13
4. 古代の遺物	18
5. 中近世の遺構と遺物	18
(1) 遺 構	18
1) 掘立柱建物	18
2) 土 坑	22
3) 炉 跡	22
4) 粘土状遺構	22
(2) 遺 物	23
III まとめ	28

挿図目次

第1図 曾和田遺跡周辺遺跡分布図	1
第2図 調査区周辺地形図	2
第3図 基本土層柱状図	3
第4図 調査区土層断面図	4
第5図 遺構分布図	5
第6図 トレンチ配置図	6
第7図 トレンチ土層断面図	7
第8図 遺物分布図(第Ⅱ層)	8
第9図 遺物分布図(第Ⅲ～Ⅳ層)	9
第10図 縄文時代遺構実測図(1)	11
第11図 縄文時代遺構実測図(2)	12
第12図 縄文時代遺物実測図(1)	14
第13図 縄文時代遺物実測図(2)	15
第14図 縄文時代遺物実測図(3)	16
第15図 縄文時代遺物実測図(4)	17
第16図 縄文時代遺物実測図(5)	18
第17図 古代・中世遺物実測図	19
第18図 中近世遺構実測図(1)	24
第19図 中近世遺構実測図(2)	25

第20図 中近世遺構実測図(3)	26
第21図 中近世遺構実測図(4)	27

表 目 次

第1表 出土遺物観察表（土器）	20
第2表 出土遺物観察表（石器）	21
第3表 出土遺物観察表（金属製品）	21

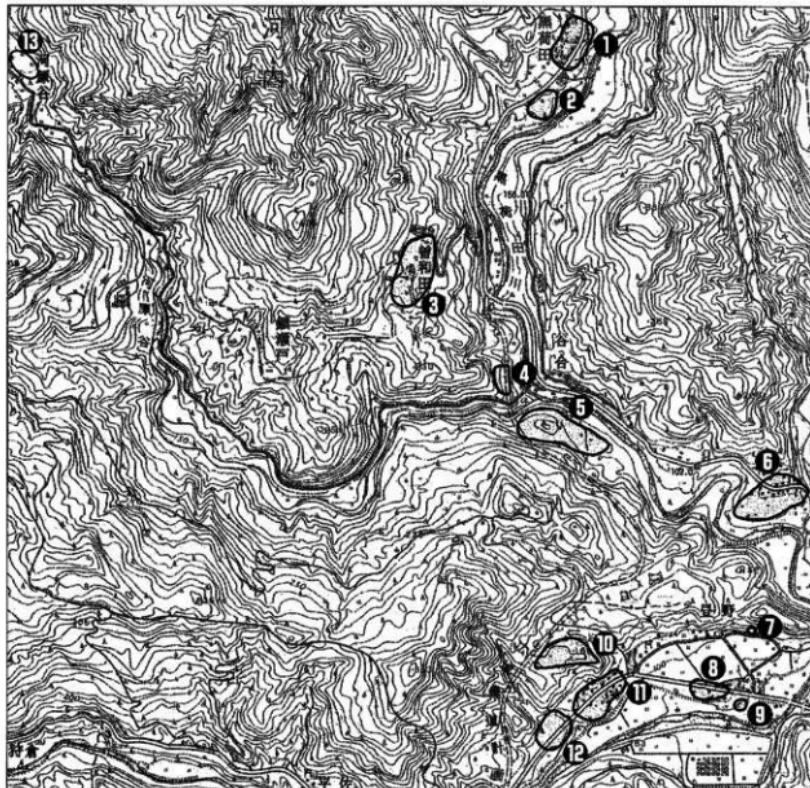
写 真 図 版 目 次

図版 1 調査区遠景、調査区全景	29
図版 2 北側壁土層断面、南側壁土層断面	30
図版 3 第1トレンチ、第2トレンチ	31
図版 4 第3トレンチ、遺物出土状況	32
図版 5 炉跡（SR 1）検出状況、炉跡土層堆積状況	33
図版 6 掘立柱建物跡検出状況、SB 3 検出状況	34
図版 7 SC 1・SC 2 完掘状況、SC 3 完掘状況、SC 4 完掘状況	35
図版 8 SC 5 完掘状況、SC 6 完掘状況、SC 7 完掘状況	36
図版 9 SB 1 検出状況、SB 2 検出状況、SB 4 検出状況	37
図版10 SB 5 検出状況、SE 1 完掘状況、SE 2 完掘状況	38
図版11 壓穴状遺構（SZ 1）完掘状況、粘土状遺構（SN 1）検出状況、調査前風景	39
図版12 出土遺物（縄文時代）	40
図版13 出土遺物（縄文時代）	41
図版14 出土遺物（縄文時代）	42
図版15 出土遺物（古代～中世）	43

I 序 説

1. 調査に至る経緯

平成12年9月にジェイフォン九州株式会社から北郷町教育委員会に対し、携帯電話無線基地局建設予定地（宮崎県南那珂郡北郷町大字北河内5333番地）における埋蔵文化財の有無について照会があった。当該地が周知の埋蔵文化財包蔵地である曾和田遺跡の範囲内に所在するため、北郷町教育委員会は確認調査を必要とする旨をジェイフォン九州株式会社に伝え、調査期間等について協議した。確認調査は、平成12年11月16日～21日（実調査日数3日）に実施した。調査の結果、柱穴や陶磁器・繩文土器などが確認された。そこで、ジェイフォン株式会社（旧：ジェイフォン九州株式会社）と協議の上、平成13年度に本調査を、平成14年度に遺物整理作業及び報告書刊行作業を行うこととなり、単年度ごとに委託契約を締結し実施することになった。発掘調査は平成13年5月15日～平成13年7月31日の期間で実施した。



第1図 曾和田遺跡周辺遺跡分布図 (1/25,000)

2. 遺跡の位置と歴史的環境

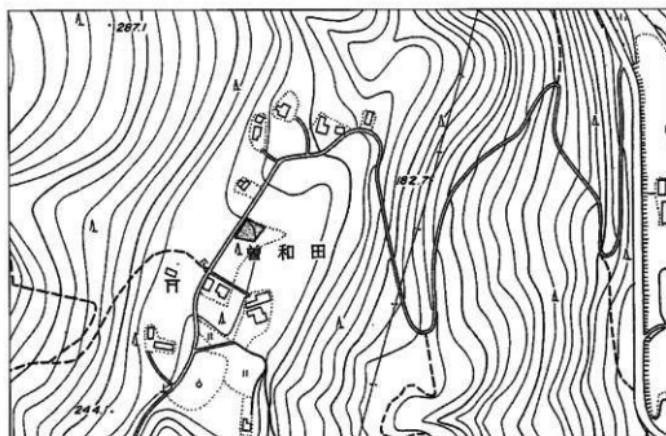
北郷町は宮崎県南部の山間部に位置し、北西部は宮崎市、清武町、田野町に接し、南東部は日南市に接する。周囲を山に囲まれ、広さは東西17km、南北15.5km、面積は179.16km²、そのうちの86.5%を山林が占めている。本町最高峰の鶴塚山(1,119m)と小松山(988m)連山の山岳が町北西部にそびえ、鶴塚山に源を発する広渡川と支流黒荷田川が山間地の中央部を流れ、郷之原、一之瀬で猪八重流群から流れる猪八重川と合流し、平坦地で穀倉地帯の郷之原、大藤を経て日南市へ注いでいる。このような地勢から、本町は、南東部を日南市に接し水田を主とする大藤・郷之原地区的平坦地域と、北西の宮崎市から三股町に接し樹園地を中心とする北河内地区的山間地域の2地域に大別される。

今回調査を行った曾和田遺跡は、北河内地区的標高約220mの山間部傾斜地にある。約500m東には黒荷田川が南流し、遺跡との比高差は約120mを測る。曾和田地区は戸数12戸の小集落である。遺跡のすぐ近くには由緒の深い先達神社がある。この神社のすぐ近くには、古くから湧き出ている湧水があり、年間を通して豊富な水量を誇っている。

先達神社は神倭伊波礼昆古命(神武天皇)と神武天皇の皇后を祭神としている。ここは神武天皇行幸の地とされており、一説には御年4才の頃行幸になり、ここで成長されたと伝えられる。この神社は以前は曾和田集落より300m程上の地点にあったが、昭和15年の紀元二千六百年祭のとき、現在の場所に移転改築された。近くにはその頃天皇が腰掛けられたという二尺七寸~三尺七寸の腰掛石があり、その前に天皇愛馬である後雪の足跡があると言われるなど、神社に由来する伝説が今なお語り継がれている地域である。

周辺には、繩文時代の遺跡である河原谷遺跡・黒荷田遺跡・谷合遺跡がある。これらの遺跡は、現在の集落とほぼ同じ位置に所在する。河原谷地区には、明治初期の建築と推測され、江戸時代に成立した形式を継承する町指定有形文化財の「海田家住宅」がある。また、谷合遺跡の南には弥生時代の遺跡である大塚遺跡があり、宿野地区の潮嶽神社に由来する大塚古墳もこの場所に所在する。

現在の集落分布状況を概観すると、山間部においては、一般的に集落は河川や湧水など水利に都合のよい山腹もしくは谷間の平坦部に形成されている。このようなことは、原始・古代の頃から現在にまで共通する集落構成要素であり、現在の集落構成も基本的には当時の集落構成の延長線上にあると考えて良い。曾和田集落も繩文時代から現代に至るまで、歴史的継続性をもって營まれ続けてきた結果、今なお存在するのであり、曾和田遺跡はまさにその集落の成り立ちを指し示す遺跡であると言える。



第2図 調査区周辺地形図 (1/5,000)

II 調査の記録

1. 調査の概要

携帯電話無線基地局の敷地面積225m² (15m×15m) を調査範囲として、重機により表土を除去した後、人力により各層の掘り下げを行った。調査区は山林であるが、以前は畠地として利用されており、表土には畠地を開墾する際に混入したと思われる縄文時代早期から近世までの遺物が多数含まれていた。

調査は表土を除去した後、第Ⅱ層の掘り下げを行い、第Ⅲ層上面を遺構検出面として精査を行った。第Ⅱ層は主として古代～中世の遺物を包含する層である。第Ⅱ層の下部～第Ⅲ層の上部にかけてはこれに縄文時代晚期の土器が混ざる。第Ⅲ層上面では、埋土が黒色土である多数のピットが検出され、その中から掘立柱建物跡を5棟確認した。それ以外のピットについては、建物跡を復元することはできなかった。ほとんどのピットは第Ⅱ層から掘り込まれたものであり、中世以降のものと思われる。その他、炉跡1基、土坑2基、そして用途不明の粘土状遺構が1基検出された。

第Ⅲ層上面で検出された遺構の実測と遺物の取り上げを終えた後、さらに第Ⅲ層の掘り下げを行い、第Ⅳ層上面を検出面として精査を行った。第Ⅲ層からは縄文時代後期の市来式、指宿式、岩崎式に類する土器が多数出土した。第Ⅲ層下部～第Ⅳ層上部にかけては縄文時代中期の船元式に類する土器が出土した。遺構は、土坑5基、溝状遺構2基を検出し、その他、灰黄褐色土の埋土が入り込んだピットが多数検出された。

第Ⅳ層から下について、調査区にトレーンチを3箇所設定して第VII層までの各層を精査した。その結果、南側の第1トレーンチの第VI・VII層から縄文時代早期の土器片が出土した。調査区は南から北にかけて緩やかに傾斜する地形を呈しており、縄文早期土器が出土した第1トレーンチは調査区内で最も高い位置にある。第1トレーンチの第VI層以下の土層の堆積状態はしっかりとしているが、北側の第2トレーンチでは第VI層以下が広範囲に渡って崩れており、アカホヤの層が欠落し疊が多く含む層が確認され、第1トレーンチとは土層の堆積状況が異なっていた。第3トレーンチはプライマリーな土層堆積状況を示しているが、地形が下がる西側部分に向かってアカホヤの層が薄くなっている。第3トレーンチからは遺物は確認されなかった。第2・第3トレーンチの地形の状況から判断すると、縄文時代早期の遺物の分布範囲は、調査区の南側に開ける平坦面に向かって展開するのではないかと推測される。

2. 基本層序

調査地の土層堆積状況は、以下のとおりである。

第Ⅰ層 表土 (耕作土: 縄文～近世の各時代・各種の遺物が混入する。)

黒褐色土。軟質。粘性多少あり。しまりあり。炭化物を多く含む。

第Ⅱ層 黒色土 (古代～中世、縄文時代晚期の遺物を包含する。)

軟質。粘性、しまりあり。5mm以下の炭化物を多く含む。

第Ⅲ層 黄褐色土 (縄文時代後期の遺物を包含する。)

軟質。粘性、しまりあり。3mm以下の炭化物を多く含む。第IV層よりも軟らかい。

第IV層 黄褐色土 (縄文時代中期の遺物を包含する。)

硬質。第III層よりも粘性は少ない。しまりあり。3mm以下の炭化物を多く含む。アカホヤに近い面が最も硬化している。遺物は第III層に比べて少ない。

第V層 アカホヤ火山灰

第VI層 暗オリーブ褐色土 (縄文時代早期の遺物を包含する。)

硬質。粘性、しまりあり。3cm程の石を多く含む。2mm以下の炭化物を少量含む。

第VII層 黑褐色土 (縄文時代早期の遺物を包含する。)

硬質。第VIよりも軟らかく粘性がある。しまりあり。5cm程の疊を含む。

第VIII層 にぶい黄褐色土

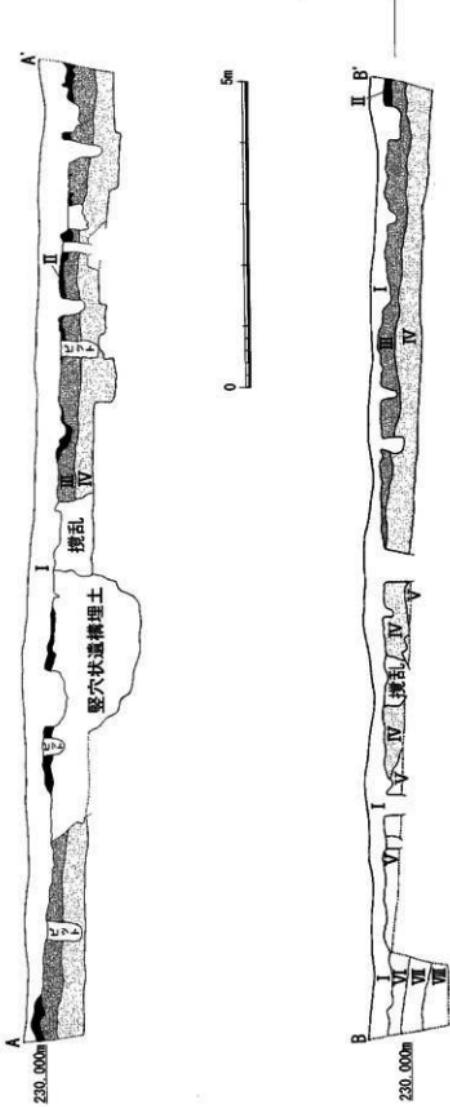
硬質。粘性、しまりあり。15cm程の疊を多く含む。

I
II
III
IV
V
VI
VII
VIII

第3図

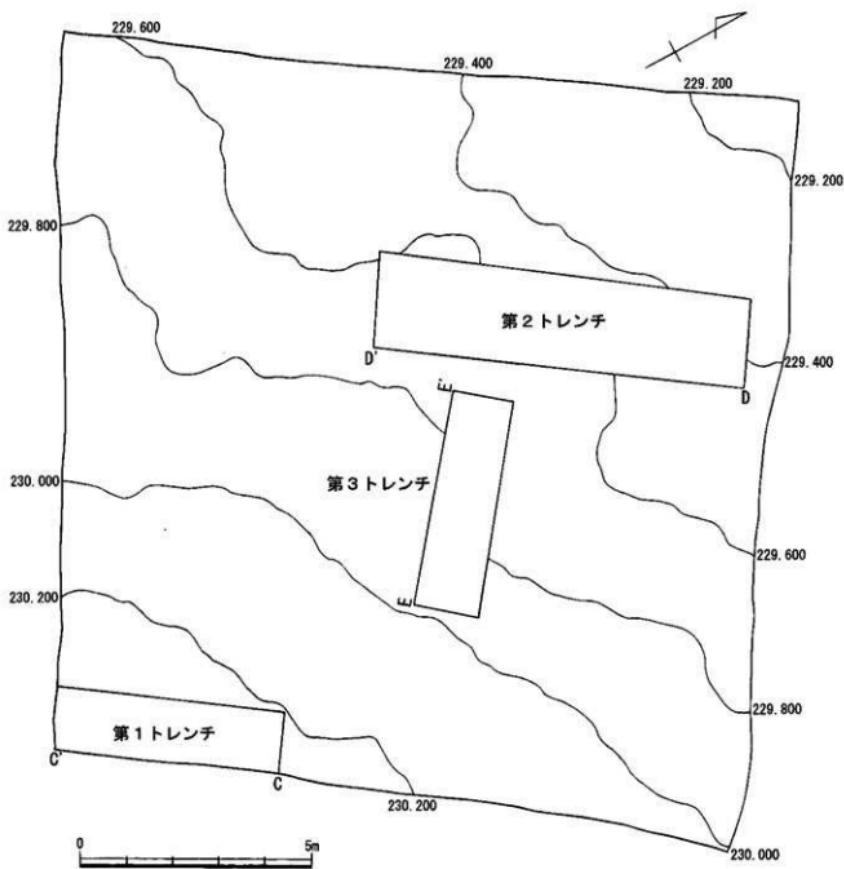
基本土層
柱状図

第4图 调查区土壤断面图

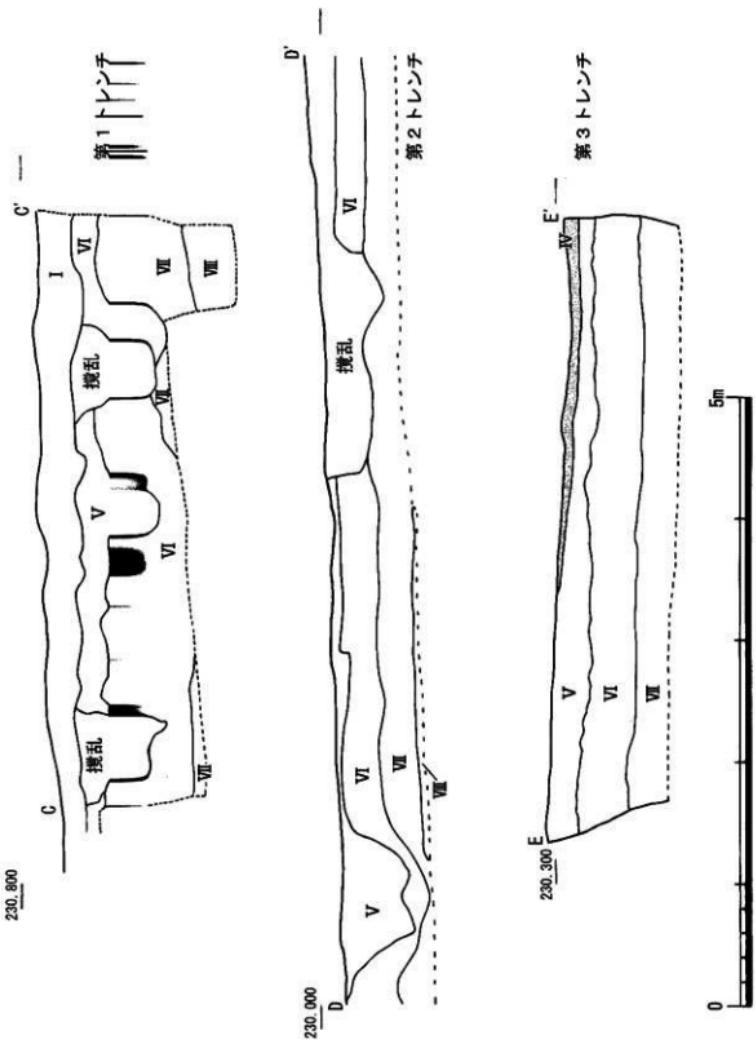




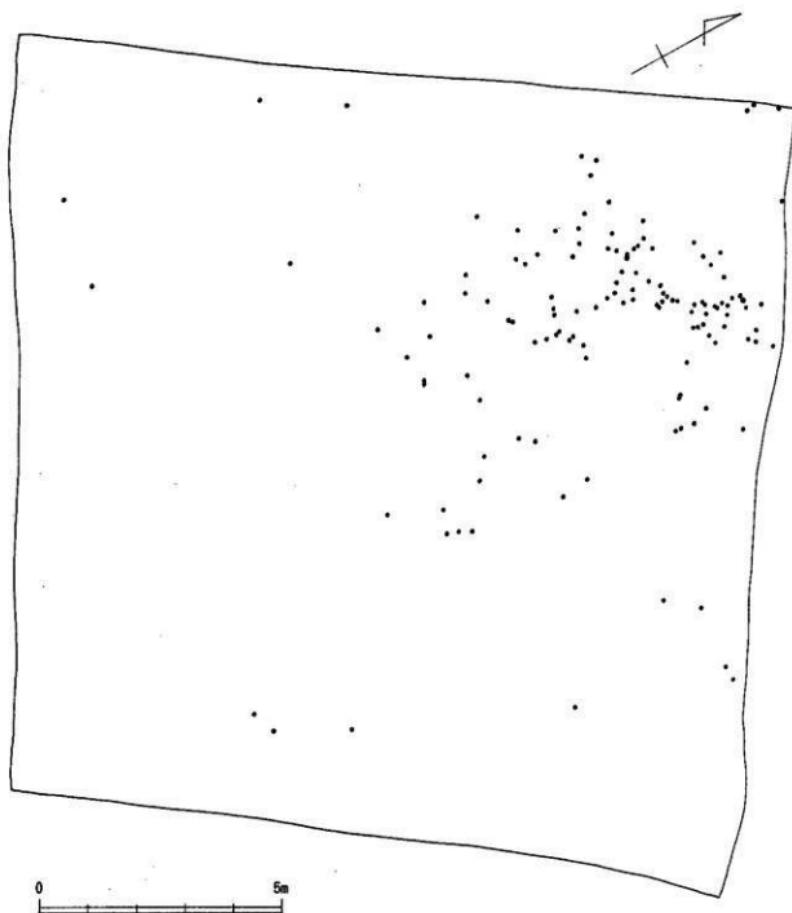
第5図 遺構分布図



第6図 トレンチ配置図

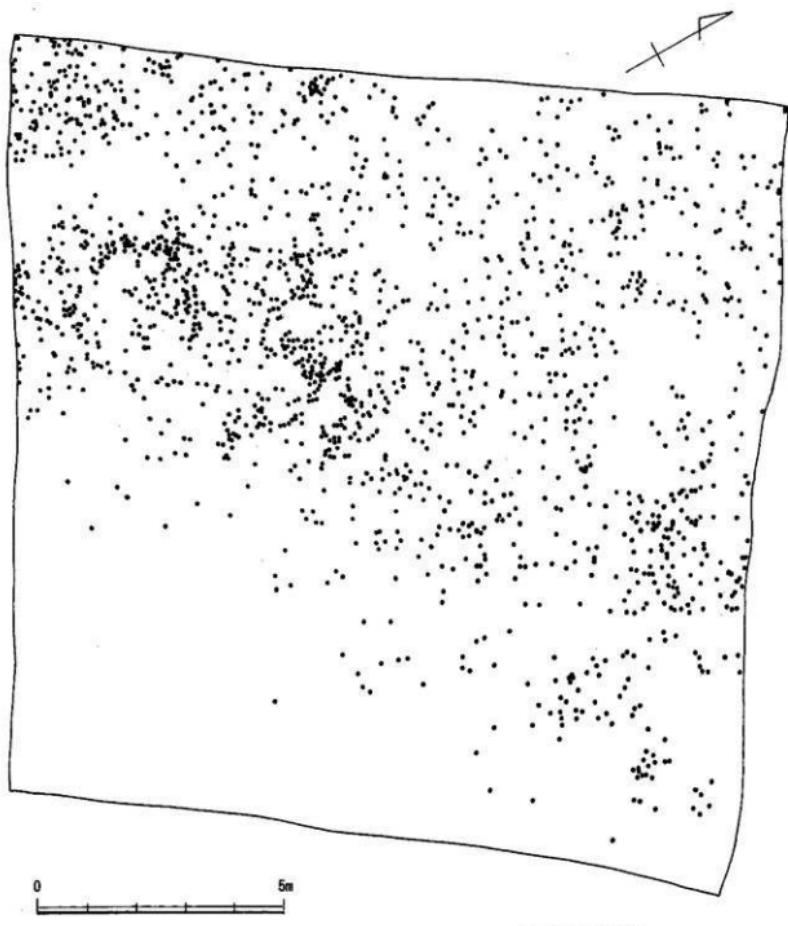


第7図 トレンチ土層断面図



●土器及び石器等

第8図 遺物分布図（第II層）



● 土器及び石器等

第9図 遺物分布図（第III～IV層）

3. 縄文時代の遺構と遺物

(1) 遺構

以下に記す土坑と溝状遺構の検出面は第IV層上面である。埋土が第II層のような黒色土ではないことから、縄文時代中期以降晩期以前のものと思われるが、共伴する良好な資料が得られなかつたので、時期は特定できなかつた。以下に示す長径・短径・最大深さは、検出面を基準とする。

1) 土坑（S C 1～5）

【S C 1】

長径不明、短径約0.5m、最大深さ約0.15mを測る。埋土は褐色土の単一層である。出土遺物はなかつた。S C 2とは切り合い関係にある。

【S C 2】

長径約0.9m、短径約0.6m、最大深さ約0.2mを測る。縄文土器の細片が数点出土した。埋土は褐色土の単一層である。S C 1と切り合つてゐる。

【S C 3】

長径約8.5m、短径不明、最大深さ約0.3mを測る。平面プランは楕円形である。埋土は褐色土の単一層で、出土遺物はなかつた。

【S C 4】

長径不明、短径約0.9m、最大深さ約0.1mを測る。平面プランは楕円形である。埋土は褐色土単一層で、出土遺物はなかつた。

【S C 5】

長径約1.3m、短径約0.5m、最大深さ約0.25mを測る。平面プランは不定形である。埋土は褐色土単一層で、出土遺物はなかつた。

2) 溝状遺構（S E 1～2）

第IV層検出面より2基の溝状遺構が検出された。いずれも、調査区西側の壁際手前から地形の傾斜に合わせて調査区外へ延長する。

【S E 1】

幅が約0.4mで、深さは約0.2mである。埋土中から遺物は確認されなかつた。

【S E 2】

軟質のオリーブ褐色土の埋土から縄文土器の細片が1点だけ出土した。底の部分には水の溜まった跡に見られるような明褐色の土が線状に確認された。幅は最も広いところで約1.0m、深さは約0.2mである。

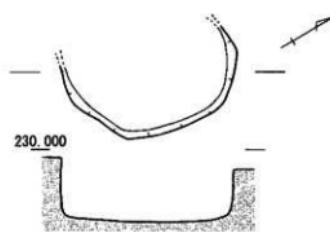
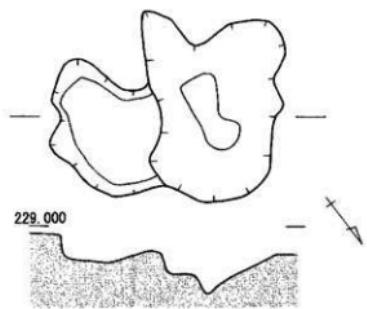
3) 壁穴状遺構（S Z 1）

検出面は第IV層上面である。調査区西側の壁際付近で確認した。壁に向かって幅2m以上の拡がりであばた状の掘り込みを有しながら傾斜し、壁側付近で急速に落ち込む。壁際の土層では第III層から埋土の色の変化が確認される。その境界ははっきりとしないが、遠目に見ると明らかに土の色の変化を確認できる。しかし、人為的と思われる明確な掘り込みがあるわけではない。落ち込み部の最下層で部分的にアカホヤの大きなブロックが混ざり、地層が攪乱を受けてゐる様子である。遺物は壁際の落ち込み部から縄文土器の破片が2点ほど出たが、遺構との関わりははっきりせず、細片のため図化していない。遺構の性格は不明である。

SC1

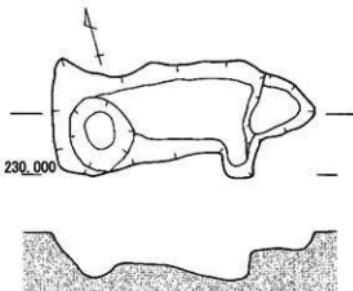
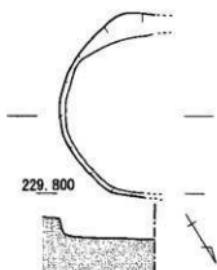
SC2

SC3



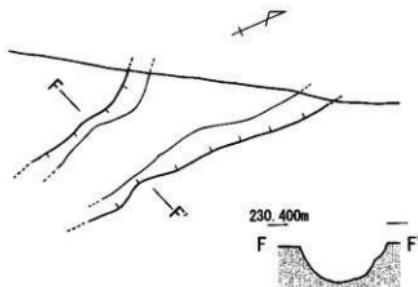
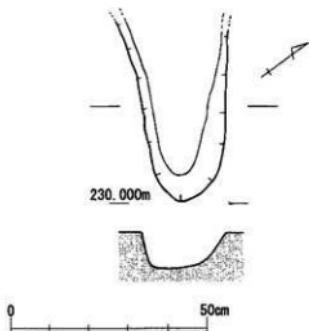
SC4

SC5

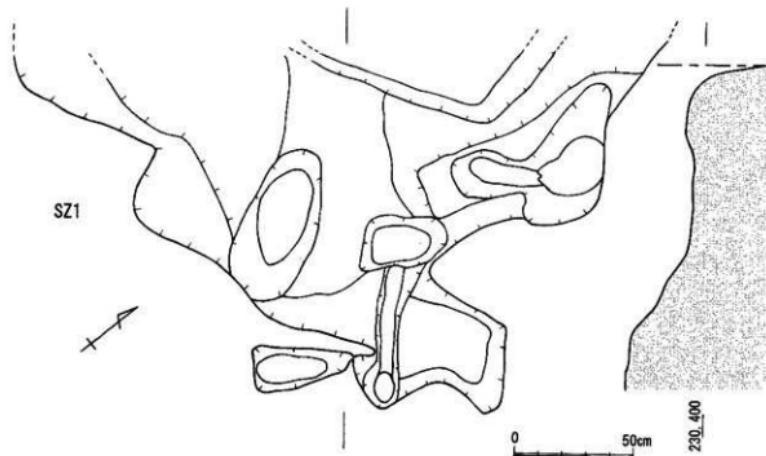


SE1

SE2



第10図 縄文時代遺構実測図(1)



第11図 繩文時代遺構実測図(2)

(2) 遺 物

第II層～第III層上部に晩期、第III層に後期、第III層下部～第IV層上部に中期、第VI層～第VII層に早期の遺物が含まれる。遺物は遺構からの出土は少なく、包含層から多量に出土する。ピットからも土器片の出土は確認されるが細片が多い。また、それがピットの時期と関係するものなのか、或いはピットを穿たれたことによって包含層中に含まれる遺物が落ち込んだものなのか、遺構の全体像を把握しない限り、単独のピットからの出土状況では正確な判断はできない。石器については、出土量は少なく、種類も限られている。

1) 土 器

【早期の土器（1～7）】

1～6は第1トレンチの出土遺物である。1～4は第VII層、5・6は第VI層からの出土遺物で、7は第1層の表探資料である。

1は外面に条痕が施文された円筒形の器形を有する土器片で、細く浅い条痕が横位に施文されている。

2と3は斜位の貝殻条痕を施文した後、縦位の貝殻復縫刺突を行っている。

4は胴部が垂直に立ち上がる円形の底部で、外面には縦位の貝殻復縫刺突が施されている。内外面ともに丁寧に仕上げてあり、焼成もしっかりしている。

5は外面に範状工具による浅い沈線が見られる。外面は丁寧に磨かれているが、内面の調整は粗い。器壁は厚くしっかりしている。同様の土器が同じトレンチから3点出土しているが、細片のため図化していない。

6は外面の破損が激しく詳細に文様を観察できないが、範状工具による短沈線を施している。内面は丁寧に磨いてあり、焼成もしっかりしている。

7は前平式の胴部である。外面は横位の丁寧な条痕、内面は縦方向のナデで調整されている。

【中期の土器（8～12）】

8と9は船元式である。8は緻密な繩文を施文した後に突帯を貼り付け、その突帯上に範状工具による刻目を施す。内面は横方向の丁寧なナデで調整されている。9は浅い繩文を施文した後に同じく突帯を貼り付けているが、突帯上に施文はされていない。内面は丁寧なナデが施

されている。

10は口縁部に刻目の入った突帯を持ち、胴部には箇状工具による刺突が横位に巡らされており、口唇部にも箇状工具による刻目を持つ。

11も10と同様の土器であるが、別個体である。両者は共に薄手で内面は丁寧に磨かれている。口縁部は波状を呈する可能性がある。

12は底部が丸底になるものである。内外面とも貝殻による条痕文が明瞭に残されている。

【後期の土器(13~37)】

13~20は市来式に類するものである。13~15は口縁部文様帶を幅広く取り波状口縁を有するもので、16~20は口縁部文様帶を広く取らず、竹管状工具による「D」字形の連続刺突や貝殻復縁刺突による施文を行うものである。

21~27は岩崎式である。21は口縁部に斜位の貝殻復縁刺突文を巡らし、その直下に深くて幅のある粗い沈線を2条巡らす。22も口縁部に貝殻復縁刺突文を巡らすが、その直下に施される2条の沈線は浅い。21と22が貝殻復縁刺突文と2条の沈線文を頸部から上の部分に配して口縁部文様帶を形成するのに比べ、23は縦位の貝殻復縁刺突文とその直下の横位の条痕をもって口縁部文様帶を形成し、頸部が太く深い沈線によって作り出されている。24は口縁部に斜位の浅い沈線を巡らし、口縁部から下は沈線文が描かれる。口唇部は平らに仕上げられている。25も口縁部直下から胴部にかけて沈線が施される。口唇部は平面的であるが、内面に向かって緩やかに傾斜する。26は口唇部に箇状工具による刻目を持ち、口縁部から胴部にかけて沈線による入組文を施す。27は胴部で、粗く深い沈線を施す。24~26が均整のとれた丁寧な沈線であるのに対し、27は21と同様、深くて幅のある粗い沈線を施す。

28~32は指宿式である。28は波状口縁の波頂部である。内面は貝殻条痕による調整が見られる。波頂部の口唇部から内面にかけては、棒状工具による深く短い沈線が施され、その先端は刺突によって止められる。外側は波頂部真下を起点として横方向に沈線が引かれる。29は28と同様の沈線を持つ胴部である。30は胴部で浅い沈線を施す。直線的な沈線と入組文が融合する。31は波状口縁の波頂部で波頂部の口唇部には二つの刻目がある。外側は太くて深い凹線と箇状工具による刺突で文様が構成される。沈線は直線的な雰囲気を持つ。32は胴部で、文様は刺突と細めの沈線による。内外面ともに丁寧なナデが施され、焼成もしっかりしている。

33と34は、後期初頭の内面施文土器で、深鉢の口縁部である。口唇部に刻みや刺突などの施文がある。

35は鐘崎式の口縁部である。繩文施文後に沈線を施し、その端部は刺突によって止められる。器壁は厚く、内外面ともに施文されている。

36と37は底部から胴部への立ち上がりが曲線を呈し、底部から胴部外面に至る調整には縦方向の貝殻復縁による条痕が見られる。器壁は比較的薄い。

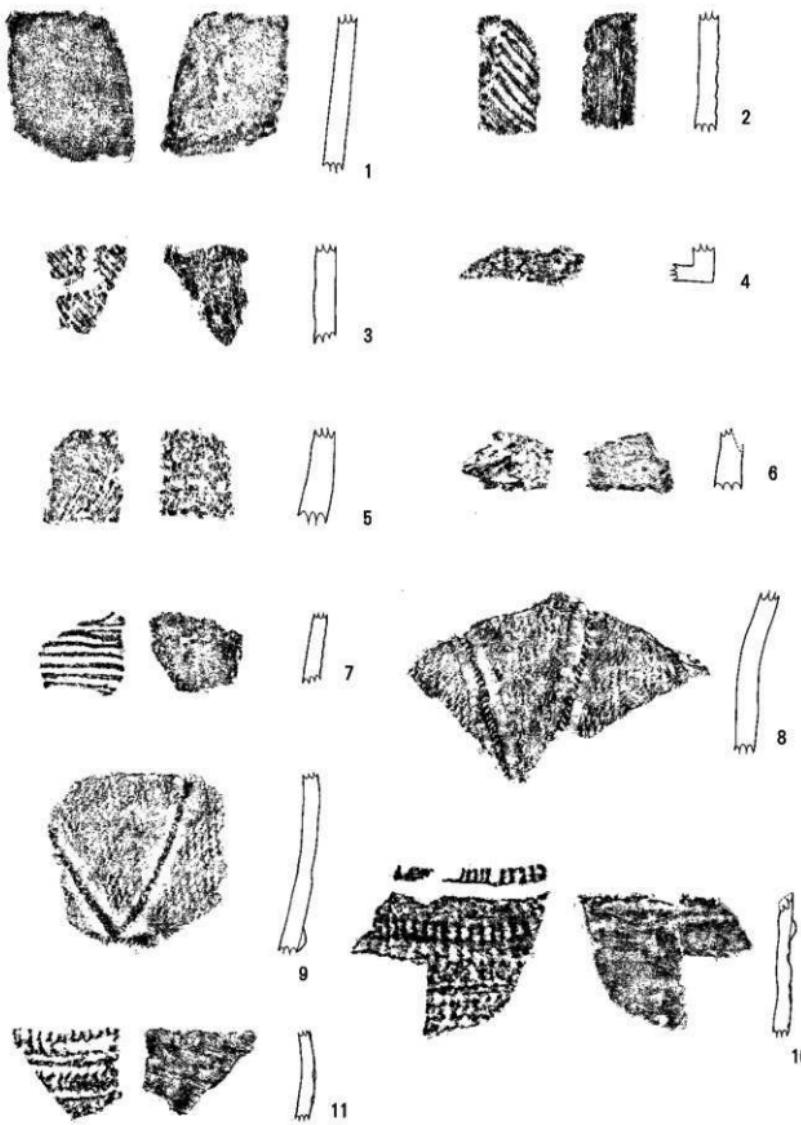
【晩期の土器(38・39)】

38と39は組織痕土器の胴部で、38は筵目圧痕が、39は編目圧痕が施文されている。

2) 石 器 (48・49)

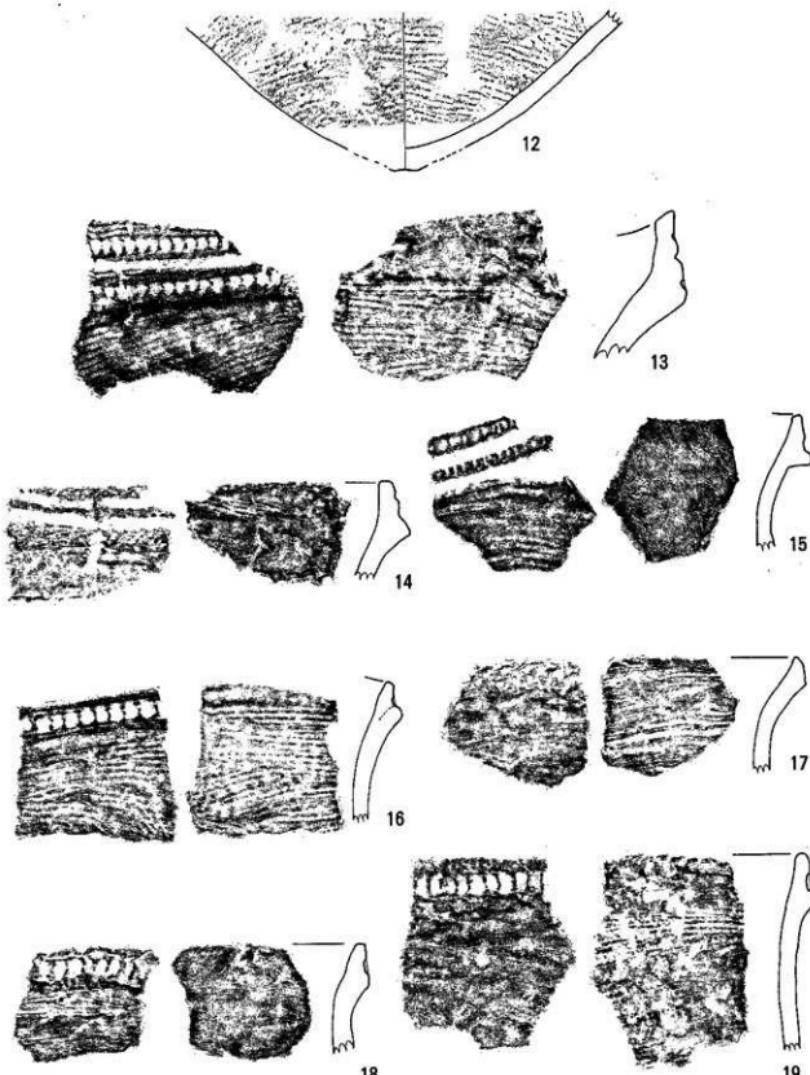
48はチャートの石鎌である。

49は砂岩製の両端切れ目石鎌である。



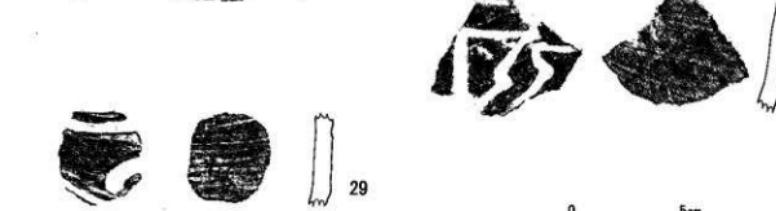
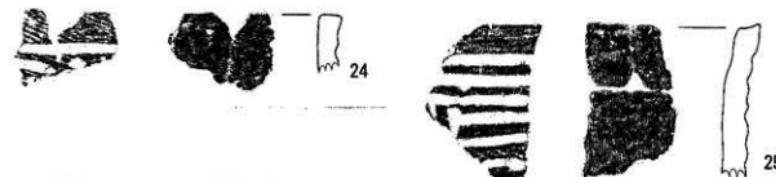
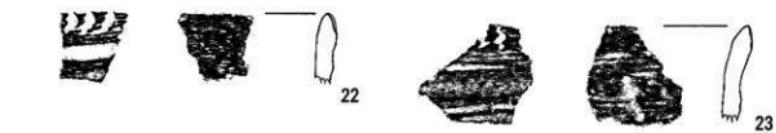
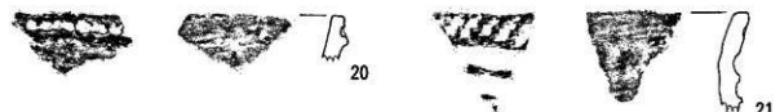
0 5cm

第12図 縄文時代遺物実測図(1)



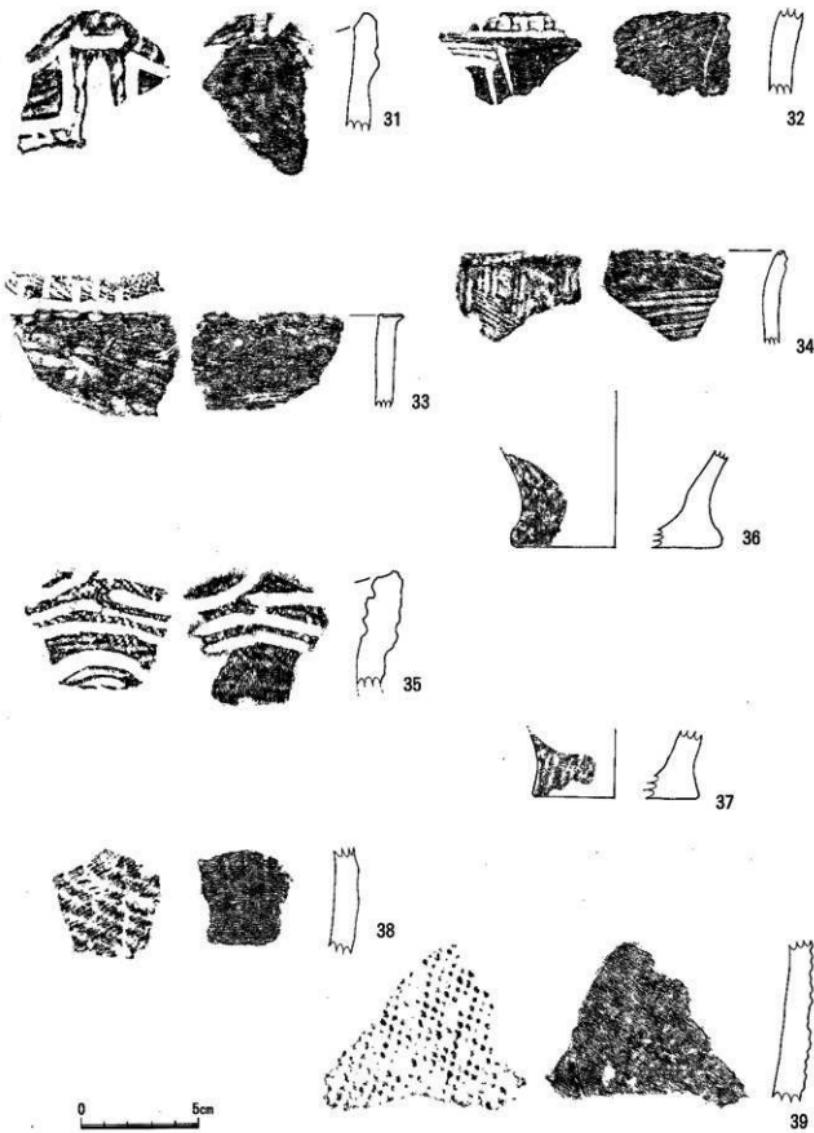
0 5cm

第13図 縄文時代遺物実測図(2)

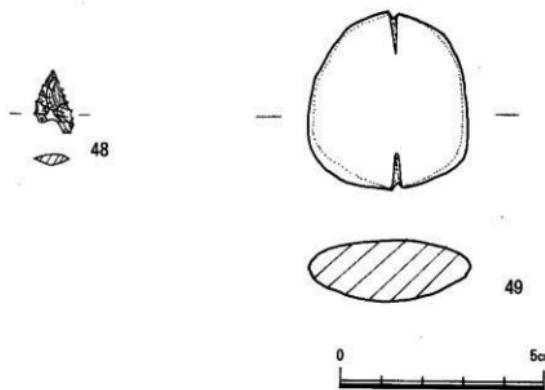


0 5cm

第14図 繩文時代遺物実測図(3)



第15図 縄文時代遺物実測図(4)



第16図 縄文時代遺物実測図(5)

4. 古代の遺物

40と41は布目痕土器の胸部と底部である。胸部外面には指頭圧痕が確認される。

42は土師器の杯の底部で、ヘラ切り底である。底部から胴部にかけての立ち上がりに厚みがあり、器面調整は内外面とともに回転ナデである。底部中心が特に薄くなっており、胴部への立ち上がり部分に至って厚みを増す。

43は高台付椀の底部であり、高台が外方に開く。焼成はあまり良くない。

45は須恵器の甕の胸部である。今回の調査で須恵器が確認されたのはこの1点だけである。

5. 中近世の遺構と遺物

(1) 遺構

1) 掘立柱建物 (S B 1 ~ 5)

今回の調査では掘立柱建物跡が5棟検出された。当遺跡ではピットが数多く検出されたが、その中から柱穴を確認し、建物跡の確認を行うのは容易ではなかった。3棟は全体を復元できたが、2棟は調査区外にはみ出している。これらの遺構は、検出面である第Ⅲ層上面に黒色土が入り込む形で確認された。S B 1・S B 2・S B 3・S B 4の4棟は北東から南北西方向に主軸を持ち、S B 5は北西から南北東方向に主軸を持つ。S B 1・S B 2・S B 4は全体を把握できるが、S B 3とS B 5は調査区外にはみ出しているため全体を検出することはできなかった。

建物跡の柱穴からは縄文土器・土師質土器・陶器等の破片が出土しており、柱穴の埋土も第Ⅱ層からの掘り込みによるものと判断できるので、これらの建物は中世以降に構築されたものと考えられる。以下に記す柱穴径及び深さは検出面を基準とする。

【S B 1】

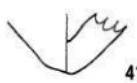
調査区の東側に検出された2間×3間の建物である。梁3.4~3.5m、桁行5.6~5.7mを測る。柱穴径は0.25~0.4mで、深さは0.1~0.5mである。柱穴から縄文土器や土師質土器の破片が出土している。

【S B 2】

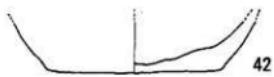
調査区中央部に検出された2間×3間の建物である。梁3.7~3.8m、桁行5.8~5.9mを測る。柱穴径は0.25~0.4mで、深さは0.2~0.65mである。縄文土器と陶器の破片が出土している。



40



41



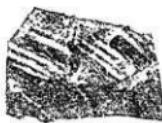
42



43



44



45



46



47

0 5cm

第17図 古代・中世遺物実測図

表1 出土遺物観察表（土器）

番号	種別	器種 部位	手法・調整・文様		色調		胎土の特徴	備考
			外 面	内 面	外 面	内 面		
1	縄文	深鉢部	横位条痕→横ナデ	ナデ	褐	煙	1mm以下の白色・透明粒を含む。	円筒貝殻文系
2	縄文	深鉢部	貝殻後縫による斜位 沈線→貝殻後縫剥突	縦方向ケズリ	明褐	にぶい褐	1mm以下の白色・透明粒を含む。	円筒貝殻文系
3	縄文	深鉢部	貝殻後縫による斜位 沈線→貝殻後縫剥突	縦方向ケズリ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	1mm以下の白色・透明粒を含む。	円筒貝殻文系
4	縄文	深底鉢部	ナデ→貝殻後縫剥突	横ナデ	煙	煙	1mm以下の白色粒を含む。	円筒貝殻文系
5	縄文	深鉢部	横ナデ	不明	にぶい煙	灰褐	1mm以下の白色・透明粒を含む。	
6	縄文	深鉢部	ナデ→短沈線	横位の丁寧なナデ	煙	にぶい黄褐	2mm以下の白色・黒い光沢粒を含む。	
7	縄文	深鉢部	貝殻後縫による横位 沈線→ナデ	縦位の粗いナデ	煙	煙	1mm以下の白色・透明粒を含む。	前平式
8	縄文	深鉢部	縄文→突帯貼付→ナデ	丁寧な横位のナデ	灰黄褐	にぶい煙	2mm以下の白色粒・微細な光沢粒を含む。	船元式
9	縄文	深鉢部	縄文→突帯貼付→ナデ	丁寧な横位のナデ	にぶい黄煙	にぶい黄煙	2mm以下の透明・白・黒褐色光沢粒を含む。	船元式
10	縄文	深鉢～部	突帯貼付→ナデ→刺突	丁寧な横位のナデ	にぶい煙	灰黄褐	1mm以下の白・褐色光沢粒を含む。	
11	縄文	深鉢部	ナデ→刺突	丁寧な横位のナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	1mm以下の褐色光沢粒を含む。	
12	縄文	深鉢部	条痕文	条痕文	赤褐	赤褐	2mm以下の褐色・白色・透明粒を含む。	
13	縄文	深鉢口縫部	横位の目殻条痕→沈線→刺突	貝殻条痕→横ナデ	煙	煙	1mm以下の透明・白・黒色粒を含む。	市来式
14	縄文	深鉢口縫部	斜位目殻後縫施文→沈線→ナデ	貝殻条痕→横ナデ	にぶい褐	明赤褐	1mm以下の透明・白色粒を含む。	市来式
15	縄文	深鉢口縫部	横ナデ沈線→刺突	横ナデ	煙	明赤褐	1mm以下の透明・白・褐色粒を含む。	市来式
16	縄文	深鉢口縫部	横位の貝殻条痕→横ナデ連続剥突	横位の貝殻条痕→横ナデ	にぶい褐	にぶい赤褐	1mm以下の透明・黒色光沢粒を含む。	市来式
17	縄文	深鉢口縫部	各痕→横ナデ 斜位の貝殻後縫剥突	条痕→横ナデ	明赤褐	明赤褐	1mm以下の透明・褐色粒を含む。	市来式
18	縄文	深鉢口縫部	条痕→横ナデ 連続剥突	横ナデ	煙	黄煙	1mm以下の透明・黒・白色粒を含む。	市来式
19	縄文	深鉢口縫部	横ナデ連続剥突	条痕→横ナデ	明赤褐	明赤褐	1mm以下の透明・白・褐色粒を含む。	市来式
20	縄文	浅鉢口縫部	横ナデ連続剥突	横位の丁寧なナデ	黒褐	暗褐	1mm以下の透明・白色粒を含む。	市来式
21	縄文	深鉢口縫部	斜位の貝殻後縫剥突 →沈線→ナデ	横ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	2mm以下の褐・白・黒色光沢粒を含む。	岩崎式
22	縄文	浅鉢口縫部	条痕→貝殻後縫剥突	横ナデ	にぶい赤褐	赤褐	1mm以下の白・透明光沢粒を含む。	岩崎式
23	縄文	深鉢口縫部	条痕→ナデ→貝殻 後縫剥突	条痕→横ナデ	赤褐	明赤褐	1mm以下の褐・透明光沢粒を含む。	岩崎式
24	縄文	深鉢口縫部	条痕→沈線→ナデ	横ナデ	明赤褐	明赤褐	1mm以下の褐・透明光沢粒を含む。	岩崎式
25	縄文	深鉢口縫部	沈線→ナデ	横ナデ	明赤褐	明赤褐	2mm以下の褐・透明光沢粒を含む。	岩崎式
26	縄文	深鉢口縫部	沈線→ナデ	条痕→横ナデ	明赤褐	明赤褐	2mm以下の褐・透明光沢粒を含む。	岩崎式
27	縄文	深鉢口縫部	ナデ→沈線	横ナデ	煙	明赤褐	2mm以下の褐・透明光沢粒を含む。	岩崎式

番号	種別	器種部位	手法・調整・文様		色調		胎土の特徴	備考	
			外 面	内 面	外 面	内 面			
28	繩文	深鉢口縁部	沈線→横ナデ	貝殻条痕→ナデ	明赤褐	明赤褐	2mm以下の褐色・透明光沢粒を含む。	指宿式	
29	繩文	浅鉢部	沈線→ナデ	横ナデ	赤褐	明赤褐	2mm以下の褐色・透明光沢粒を含む。	指宿式	
30	繩文	深鉢底	沈線→ナデ	横ナデ	燈	燈	2mm以下の褐色・透明光沢粒を含む。	指宿式	
31	繩文	深鉢口縁部	沈線→刺突	ケズリ→横ナデ	黒褐	燈	1mm以下の白・黒褐色粒を含む。	指宿式	
32	繩文	深鉢底	丁寧なナデ→沈線→刺突	横位の丁寧なナデ	灰褐	赤褐	1mm以下の透明・白・褐色粒を含む。	指宿式	
33	繩文	深鉢口縁部	横ナデ	横ナデ	灰褐	明赤褐	1mm以下の透明・白・灰色粒を含む。		
34	繩文	深鉢口縁部	縦位の条痕→縦位のナデ	横位の条痕→横ナデ	にぶい褐	灰褐	1mm以下の半透明・白・黒色粒を含む。		
35	繩文	深鉢部	沈線→繩文	沈線→繩文	にぶい黄褐	にぶい黄褐	1mm以下の透明・白色粒を含む。	鐘崎式	
36	繩文	深鉢底	縦位のケズリ→横ナデ	粗いナデ	明赤褐	黒	1mm以下の白・褐・透明粒を含む。		
37	繩文	深鉢底	縦位のケズリ→横ナデ	粗いナデ	燈	明赤褐	1mm以下の灰白・褐色・透明粒を含む。		
38	繩文	深鉢部	筵目压痕	丁寧な磨き	明褐	灰褐	1mm以下の白色・半透明粒を含む。		
39	繩文	深鉢部	編目压痕	横ナデ	にぶい黄褐	暗褐	2mm以下の半透明・灰白色粒を含む。		
40	土師器	鉢底部	指揮さえ、ナデ	布目压痕	燈	橙	3mm以下の砂粒を含む。	布目痕土器	
41	土師器	鉢底部	指揮さえ、ナデ	布目压痕	燈	燈	1mm以下の砂粒を含む。	布目痕土器	
42	土師器	杯底部	回転ナデ	回転ナデ	浅黄燈	浅黄燈	1mm以下の灰・燈・褐色粒を含む。	ヘラ切り	
43	土師質	高台付き碗	横ナデ	横ナデ	黄灰	浅黄燈	1mm以下の褐色粒を含む。		
44	土師質	杯底部	回転ナデ	ナデ	浅黄燈	褐灰	1mm以下の透明・灰白色粒を含む。		
45	須恵器	壺胴部	斜方向のケズリ→横方向のナデ	縦方向のナデ	灰白	灰白	1mm以下の白色粒を含む。		
46	土製品	土錐	長さ 5.4cm	幅 1.2cm	孔径 4mm	重量 7g	赤	赤褐	1mm以下の透明粒を含む。
47	土製品	人形	精緻	精緻	浅黄燈	浅黄燈	1mm以下の砂粒を含む。	上半身部分欠落	

表2 出土遺物観察表(石器)

番号	品種	長さ	幅	厚さ	石材	備	考
48	石鐵	1.5cm	8.5cm	0.3cm	チャート		
49	石錐	4.4cm	3.9cm	1.5cm	砂岩		

表3 出土遺物観察表(金属製品)

番号	品種	長さ	幅	厚さ	重量	備	考
50	銅錢	2.3cm	—	0.15cm	2.0g	洪武通宝	

【S B 3】

調査区西側の壁を境にして、建物跡の半分が検出された。遺構は調査区外に広がるため全体を把握することはできないが、柱穴径及び柱の間隔がほぼ一定しているので建物跡として認識するに至った。柱の間隔は2.1m～2.2mで、柱穴径は0.25～0.3mである。柱の間隔と柱穴径のばらつきが非常に少なく、他の建物跡と比較した場合に規格上の精度が高いという印象を受ける。よって、他の4棟よりも時期的に新しいものではないかと思われる。土師質土器と陶器の破片が出土している。

【S B 4】

調査区中央部北東寄りに検出された2間×3間の建物である。梁3.4～3.7m、桁行5.8mを測る。柱穴径は0.3～0.4mで、深さは0.15～0.55mである。柱穴からの遺物の出土はなかった。

【S B 5】

調査区北東部で検出されたが、遺構は調査区外に広がるため全体の把握はできない。建物跡として判断したのは、5つの柱穴の径と深さがほぼ同じで一直線に並んでおり、柱穴径の大きさと深さが桁行8.2mを測る建物の規模としても適当と見なしたからである。柱穴径は約0.5mで、深さは0.6～0.8mである。調査区内にはこれと合致する柱穴が見あたらないので、この建物は調査区の北側に広がりを持つものと思われる。柱穴からの遺物の出土はなかった。

2) 土坑 (S C 6～7)

土坑は2基検出された。以下に示す長径・短径・最大深さは検出面を基準とする。

【S C 6】

第III層上部検出面から、長径約1.7m、短径約0.8m、最大深さ約0.7mを測る。平面プランは橢円形、埋土は第II層单一である。土坑の隅にアカホヤがブロック状に混ざっている部分が見られるが、これは土坑を掘削する以前に攪乱を受けた部分と考えられる。土坑はその攪乱部分を切って掘り込まれている。よって、本来のS C 6の壁はこのアカホヤがブロック状に混ざる埋土と第II層黒色土の埋土の境界部分であると推定される。

遺物は埋土から縄文土器や土師質土器の破片が数点と銅製の錢貨が1点出土している。錢貨は全体の腐食が激しく、破碎していく原型を留めていない。ただ、S C 6以外にも第II層から銅製の洪武通宝が1点出土しているので、この土坑から出土した錢貨がこれに近い年代のものであるならば、S C 6は安土桃山時代～江戸初期にかけての遺構と推測される。

なお、土坑内に見られる3本のピットは土坑とは切り合い関係にある。土坑の検出面では20～25cm大の焼石が集中して確認されたが、焼石の分布が土坑内のピットの真上に集中していることから、焼石は土坑ではなくて土坑内のピットに関連するものであると考えられる。

【S C 7】

長径約1.6m、短径約0.5m、最大深さ約0.4mを測る。平面プランは長方形である。埋土は第II層黒色土单一で、縄文土器と土師質土器の親指大ほどの破片が出土した。用途・時代共に不明。

3) 炉跡 (S R 1)

直径約1mの不定プランを呈する炉跡が1基検出されている。炉跡内に確認されるピットは、遺構と関係なく、後になって掘り込まれたものである。遺構検出の段階で焼土があることを確認したが、焼土がこれを切るピットの埋土と混ざりあって見えるため、当初は炉跡全体の輪郭を把握するのが困難だった。焼土中からは縄文土器や土師器の細片が出土した。焼土中より土師器の破片が認められることから、遺構は第II層に包含される遺物に関連する時代のものと思われる。

4) 粘土状遺構 (S N 1)

第III層上部を掘り下げる途中で確認された。硬化した粘土状の土が、ほぼ均一の厚さ(約2～4mm)で器状に広がっている。硬化した土は火を受けた様子は見られず、非常に脆い。第III層上

部検出面からのは確認できなかった。ただ、この周辺を精査する際に灰白色の粘土がブロック状に点在するのを確認している。しかし、このことがこの遺構とどう関わっているかを判断することはできなかった。出土遺物は土師器の細片が1点のみ硬化粘土に埋まって検出された。

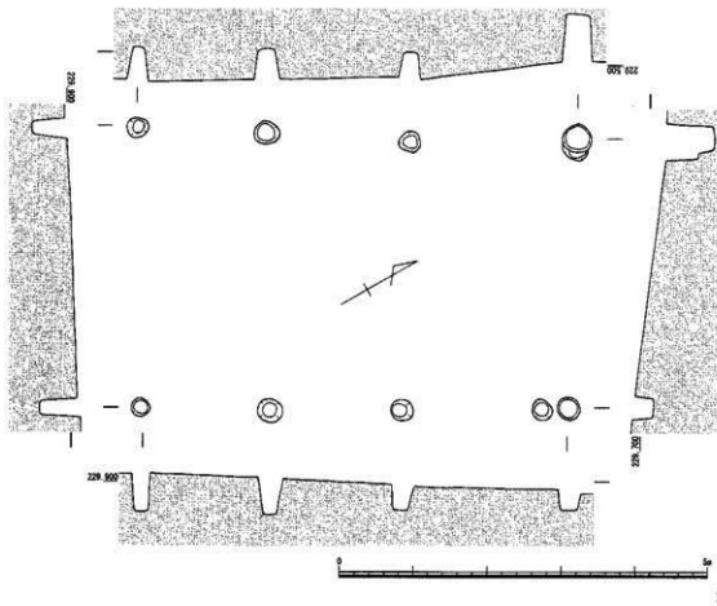
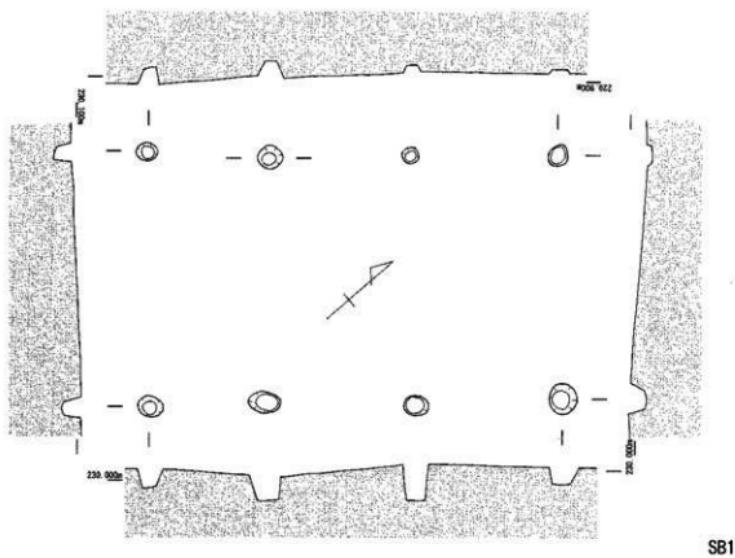
(2) 遺物 (44~50)

44は杯の底部である。底部側面と胴部立ち上がり部には、轆轤の回転を利用して沈線が巡らされている。

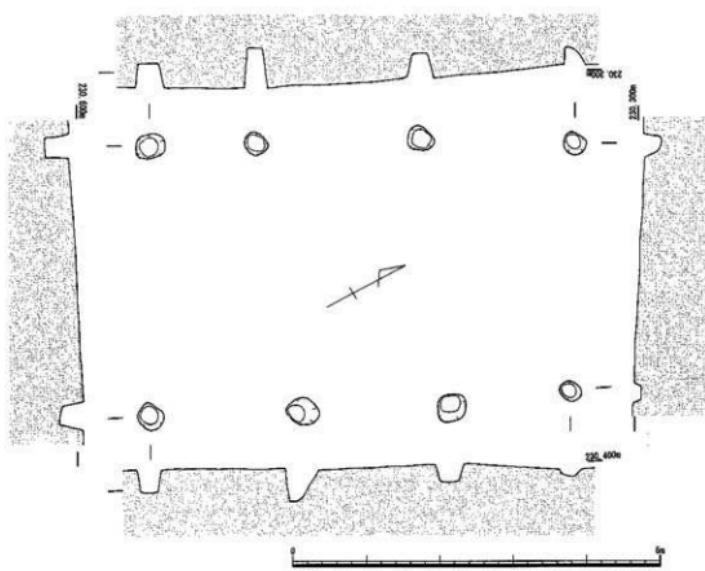
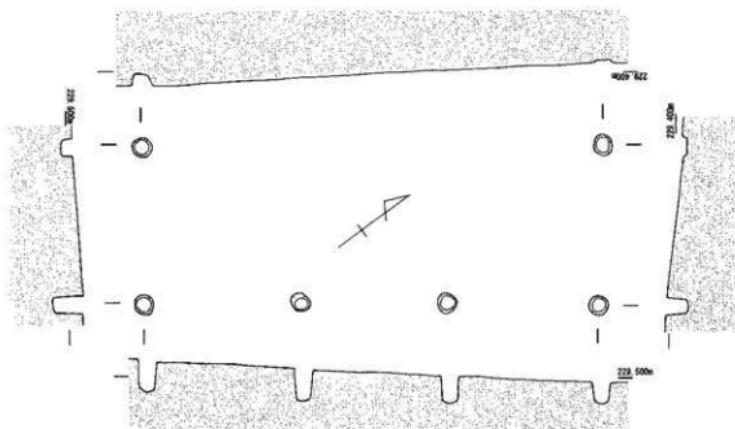
46は土製品の有孔土錐である。全長約5.5cmで両端部が多少細くなる。孔径約3~4mmを測る。焼成はやや軟質で、色調は明赤褐色である。

47は土製品の人形で、精選されたきめ細かな粘土により成形されており、細部に至るまで精巧に作られている。腰から上の部分が欠落しており、周辺の包含層からも上半部は確認されなかった。SC 1上部の包含層からの出土であるが、SC 1と関連があるのか詳細は不明である。

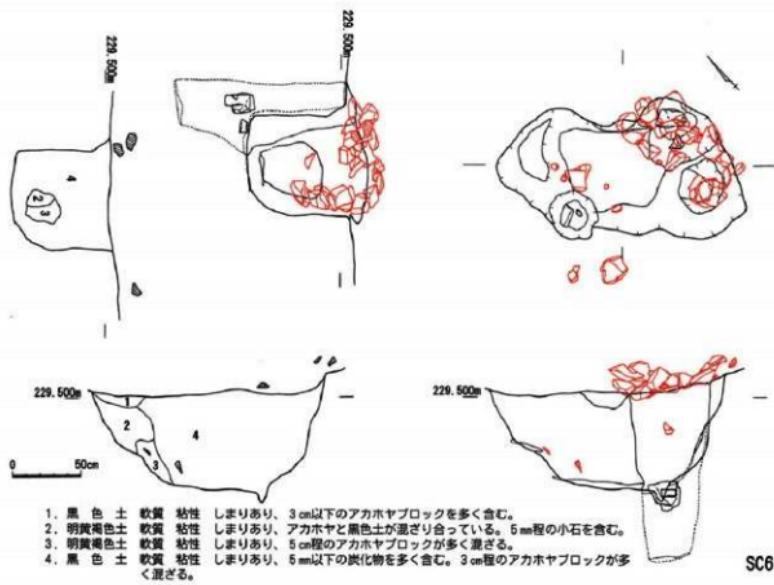
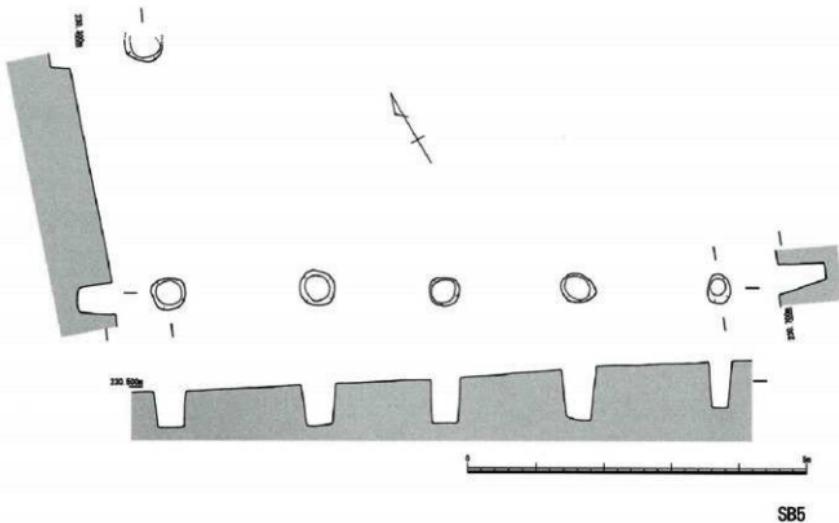
50は無背の洪武通宝である。かろうじて「洪武」の文字を読むことができる。銭貨は他にSC 6とビットから出土したものがあるが、いずれも腐食が進んでいて粉碎しており、種別を判定することはできなかった。



第18図 中近世遺構実測図(1)

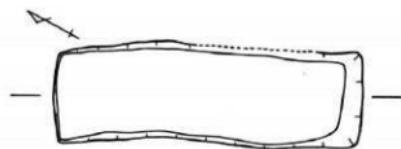


第19図 中近世遺構実測図(2)



第20図 中世遺構実測図(3)

SC7

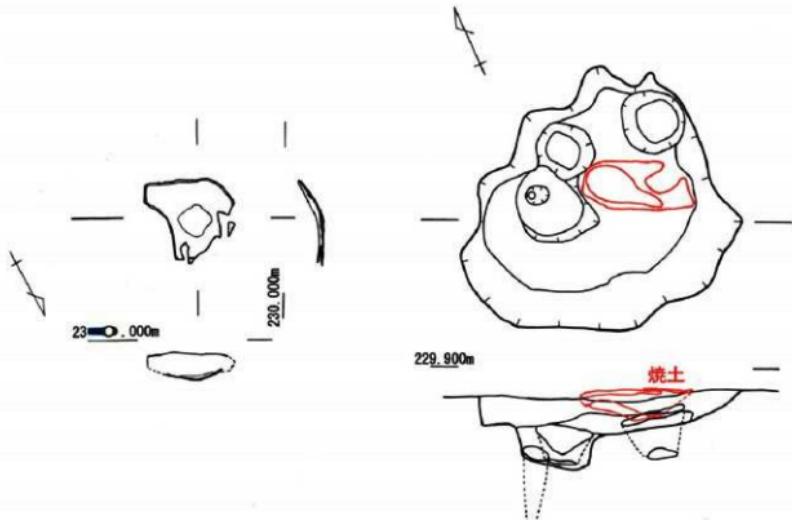


231.000m



SN1

SR1



0 50cm

第21図 中近世遺構実測図(4)

III まとめ

曾和田遺跡は、縄文時代早期から中近世までの遺構・遺物を包含する複合遺跡である。今回は携帯電話無線基地局建設予定地内の調査であり、限られた面積での調査であったが、縄文時代早期以降、この地に人々の生活が展開されていった痕跡を断片的ではあるが確認できた意味は大きい。

今回の調査結果を時代別にみると、縄文時代では早期と中期から晩期にかけての各時期の遺物が確認された。早期については、トレンチ調査の結果、調査区中央部から北側にかけて包含層である第VI・VII層が消失しており、拳大ほどの疊層の広範な広がりを確認した。調査区南側部分の地層は擾乱を受けている様子もなく、第1トレンチからは早期の遺物が確認されていることから、早期包含層は調査区より南側の平坦部分を中心に展開するのではないかと予想される。

中期～晩期については、遺物の出土は多く見られたが、そのほとんどが包含層からの出土であり、住居跡等の遺構は確認されなかった。出土した土器の中で主なものは、中期では船元式、後期では市来式・岩崎式・指宿式などである。その他、鐘崎式の土器の口縁部が1点出土している。縄文時代の遺物の中で、量的に最も多かったのが後期の土器である。一方、石器はあまり見られず、石錐1点と石錐1点が確認されている。完形に近い物ではなく、遺物の出土は、複数個体の各部位の破片が調査区一帯に散見されるといった状況を呈していた。晩期の土器では、組織痕土器の出土が目立っている。

古代～中近世にかけては、第II層より多量の遺物が確認された。古代の製塙土器である布目痕土器も多数確認された。椀、杯、皿、甕などの土師器の破片が多く、須恵器は1点出土した。完形に近い物は皆無で、出土遺物は細片が多く、周辺から出土する遺物との接合を試みても、一個体分を復元するのは困難であった。

包含層からは洪武通宝も確認されており、第II層は古代から室町期を中心とする時代の遺物を多く含んでいることがわかった。また、SC6からも銭貨の出土が見られたが腐食が激しく、形を留めていなかった。また、第I層からは縄文時代から近世までの土器や陶磁器の破片が散見されるなど、これらはこの周辺一帯が古来より生活に適した居住環境を維持し続けていることを示唆するものと考えられる。

最後になりましたが、現地調査及び報告書の執筆にあたり多くの方々より貴重な御指導と御助言をいただきました。ここに記名して感謝申し上げます。

飯田博之 金丸武司 重留康宏 代田博文 的場丈明 宮田浩二（敬称略）



調査区遠景



調査区全景



北側壁 土層断面



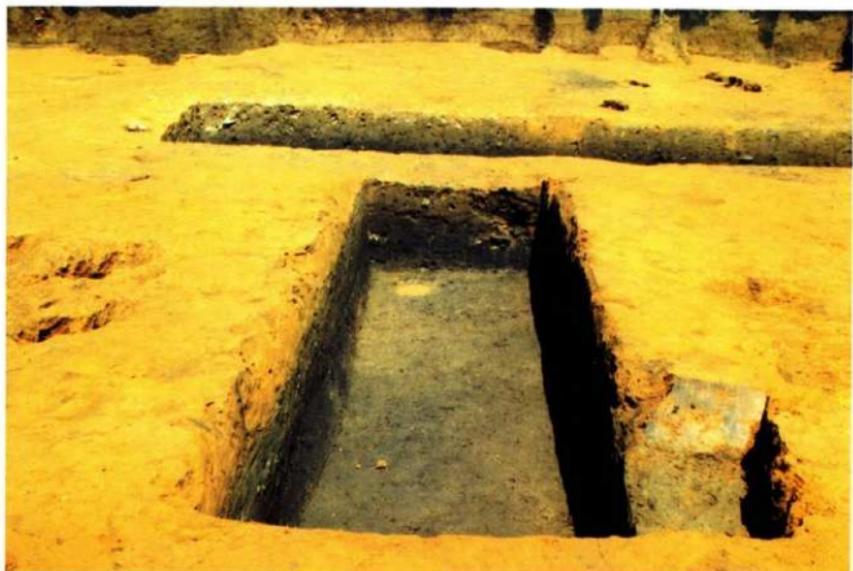
南側壁 土層断面



第1トレンチ



第2トレンチ



第3トレンチ



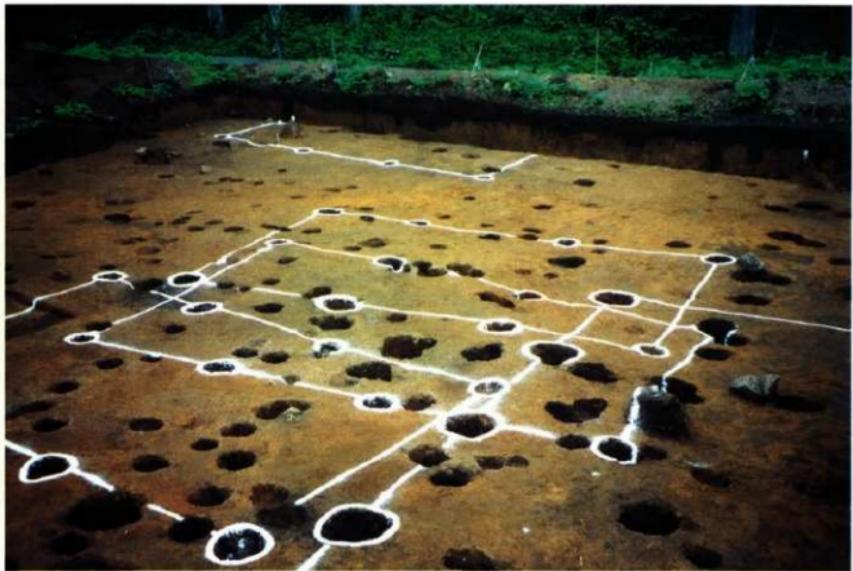
遺物出土状況



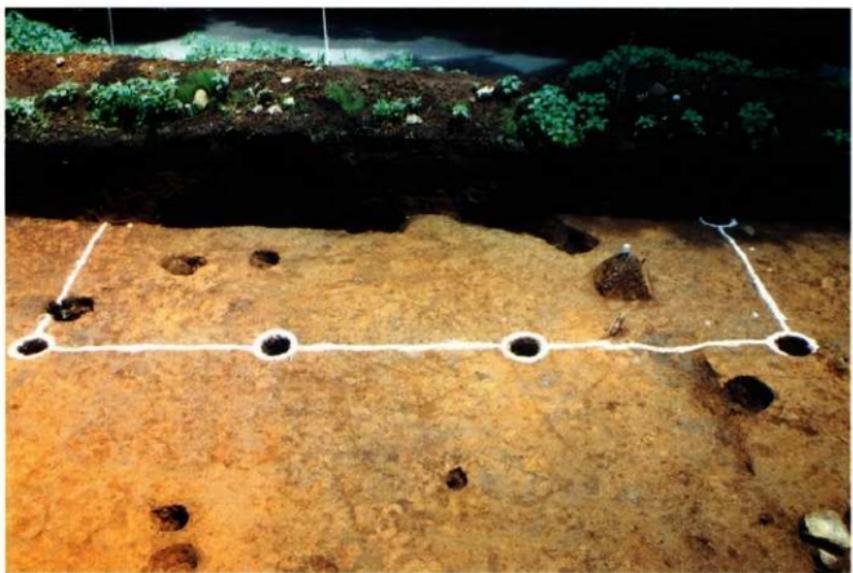
炉跡(SR1)検出状況



炉跡土層堆積状況



立柱建物跡検出状況



SB3検出状況



SC1 • SC2完掘状况



SC3完掘状况



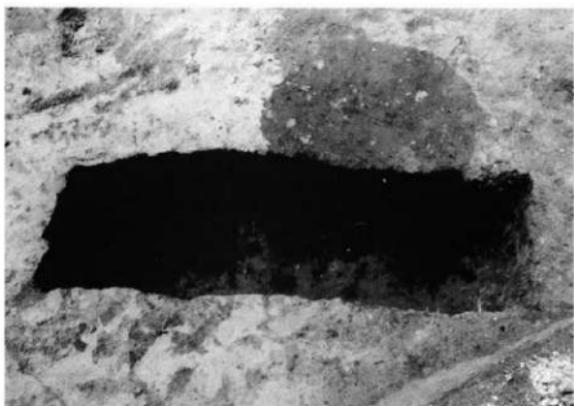
SC4完掘状况



SC5完掘状况



SC6完掘状况



SC7完掘状况



SB1検出状況



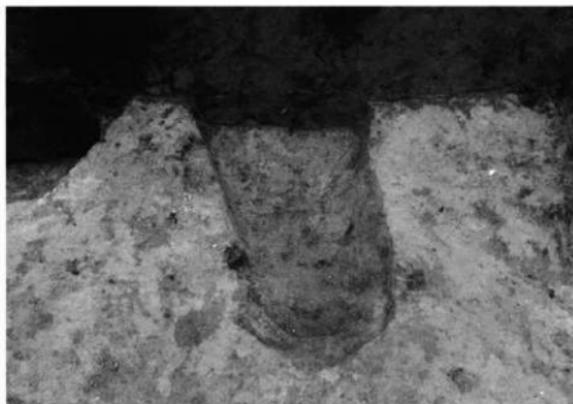
SB2検出状況



SB4検出状況



SB5検出状況



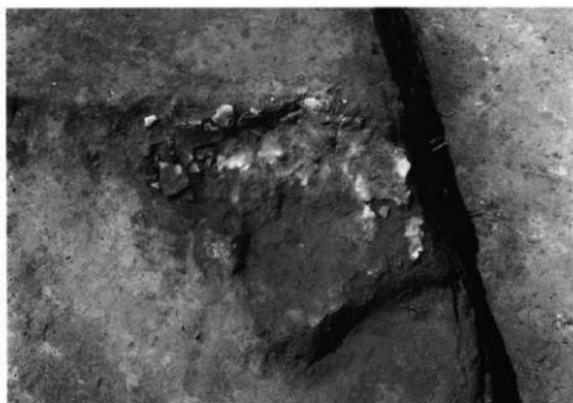
SE1完掘状況



SE2完掘状況



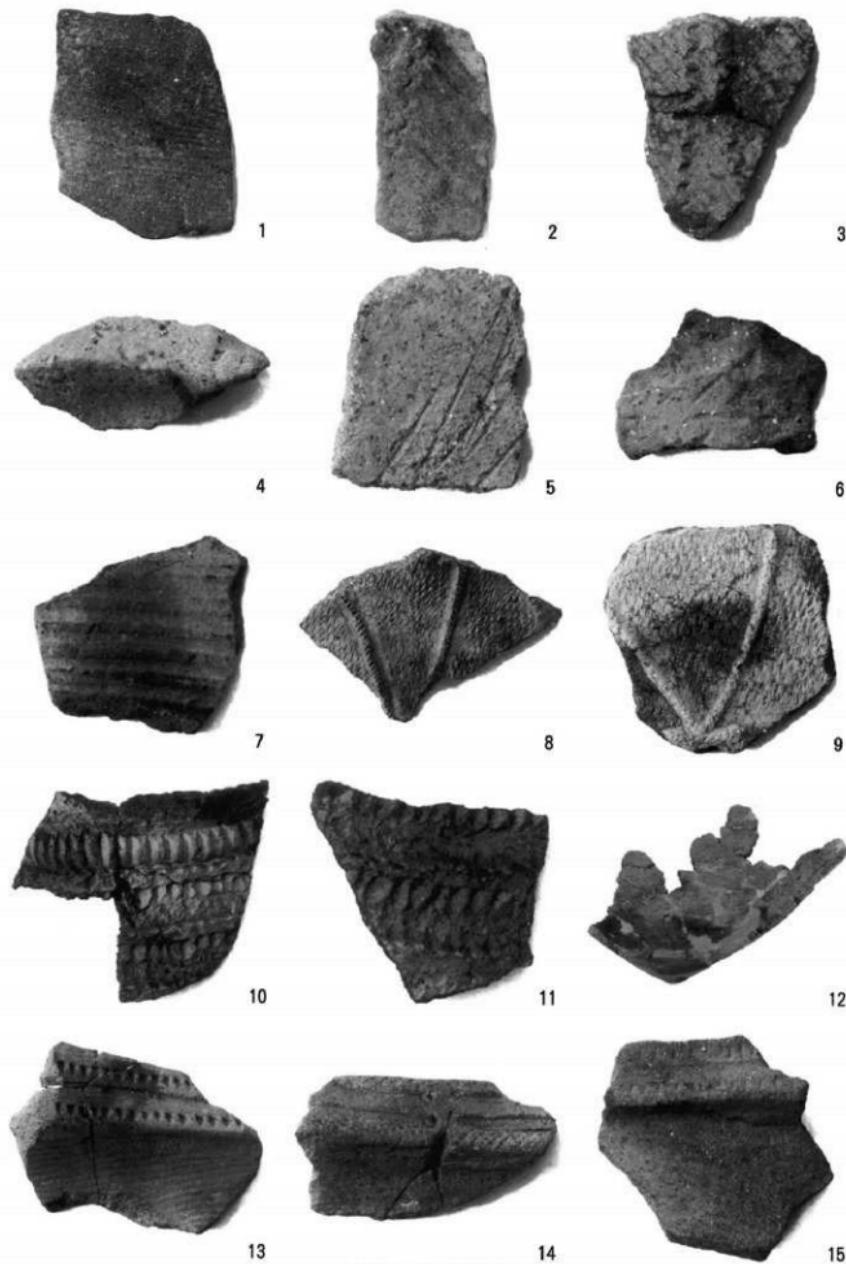
堅穴状遺構(SZ1)完掘状況



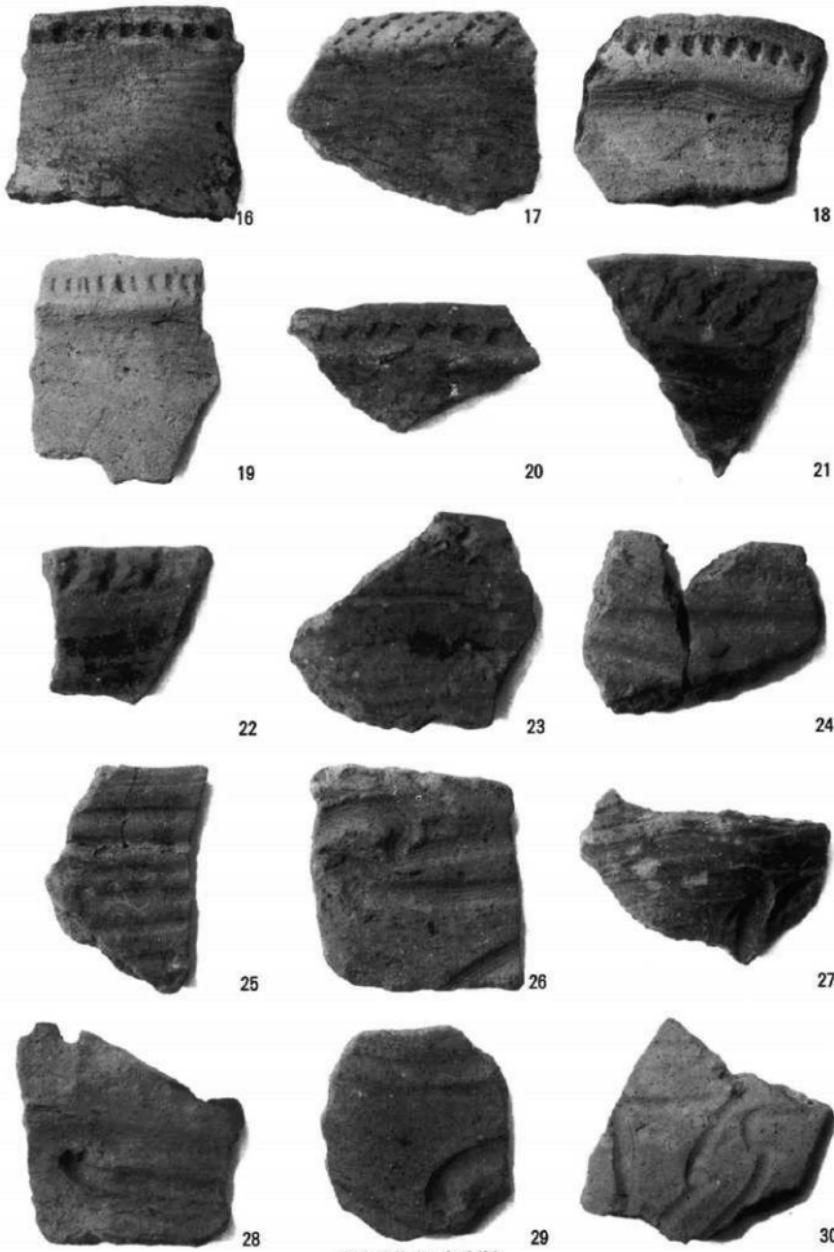
粘土状遺構(SN1)検出状況



調査前風景



出土遺物(縄文時代)





31



32



33



34



35



36



37



38



39



48



49



40



41



42



43



44



45



46



47



48

報告書抄録

フリガナ	ソワタイセキ			
書名	曾和田遺跡			
副書名	ジェイフォン西日本株式会社 携帯電話無線基地局建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書			
卷次				
シリーズ名	北郷町文化財調査報告書			
シリーズ番号	第12集			
編集者名	平原英樹			
発行機関	北郷町教育委員会			
所在地	宮崎県南那珂郡北郷町大字郷之原乙1477番地			
発行年月日	平成15年3月31日			
収藏遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査原因
曾和田遺跡	宮崎県南那珂郡北郷町 大字北河内5333番地	01.5.15 ～ 01.7.31	225m ²	携帯電話無線基地局建設
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
散布地 集落跡	縄文時代 (早期・中期・後期・晩期)	土坑5基 溝状遺構2基 竪穴状遺構1基	船元式・市来式 岩崎式・指宿式	
	古代～近世	掘立柱建物5棟 炉跡1基 粘土状遺構1基 土坑2基	土師器 土製品 陶磁器 洪武通宝	

北郷町文化財調査報告書第12集

曾和田遺跡

ジェイフォン携帯電話無線基地局建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2003年3月

編集発行

宮崎県北郷町教育委員会

〒889-2492 宮崎県南那珂郡北郷町大字郷之原乙1477番地
TEL(0987)55-2111 FAX(0987)55-2157

印 刷

(有)日南光文堂印刷

